

→奈良高畑にて、志賀直哉を訪問した小林多喜二

2021.12.12 (日) カルチャーウォーキング

関西文学散歩 第 564 回 参加報告

目の前左上に、奈良ホテルが見えてきた。右側の崖下が、大乘院庭園である。裏木戸から庭園文化館を目指す。こんなところに裏木戸があり、そこから入園できることを初めて知った。本来は、入園料を払わねばならず文化館玄関から入らねばならない。裏木戸からの入園はイレギュラーですから……、と説明があった。大乘院は興福寺の門跡寺院で、寛治元年の創建。治承 4 年の南都焼き討ち後、現在地に移り、明治期の廃仏毀釈まで存続していたが、敷地は一部が奈良ホテルとなり、南側の庭園部が、江戸末期の門跡隆温(二条家出身)が描いた「大乘院四季真景図」をもとに復元工事が行われ、以来、一般公開されている。庭園の西半分を巡り、文化館へ。館長さんが、懇切に説明して下さり、文化館を見学した後、庭園の東半分を巡るのだという。結局、一周するわけだが、池と、植栽のコンビネーションが美しい。再び裏木戸から退出、奈良ホテルエントランスを通行して荒池から、春日大社「一の鳥居」へ出た。ここで、「奈良マラソン」の一団と遭遇する筈だったが、時間差で回避できた。



大乘院庭園

と、ここまでは良かったが、南大門前・高畑山線の自動車道と交差する辺りで、「奈良マラソン」と遭遇、係の人に、通行を遮られ、横断を待たされた。同じ文化でも、こちらは文学、あちらはスポーツ。今や、参加費ひとり 15,000 円というスポーツの力は大きい。ボランティアさんが、鹿は、一団を飛び越えていくんだが……という。ああ、鹿になりたい。

やっと、集団が途切れ「渡って～」という声とともに、一斉に道を渡り、春日大社の二の鳥居前を右折して馬酔木の森へ向かう。「馬酔木」は、鹿が嫌う植物だそうで、その森ならお弁当を広げていても鹿に邪魔されないというので、「馬酔木の森」別名を「ささやきの小径」ともいう沿道で、昼食。この道から、高畑の志賀直哉旧居まで、あと少しである。

やっとなら、集団が途切れ「渡って～」という声とともに、一斉に道を渡り、春日大社の二の鳥居前を右折して馬酔木の森へ向かう。「馬酔木」は、鹿が嫌う植物だそうで、その森ならお弁当を広げていても鹿に邪魔されないというので、「馬酔木の森」別名を「ささやきの小径」ともいう沿道で、昼食。この道から、高畑の志賀直哉旧居まで、あと少しである。



志賀直哉旧邸 サンプルーム

現在、奈良学園がセミナーハウスとしている旧居は、一般にも公開されている貴重な登録有形文化財の建物である。志賀直哉自身が昭和 3 年に設計して移り住んだという数寄屋造りの和風建築であるが、一部、洋風のサロンやダイニングホールを備えている。皆で順次、各部屋を見学し、子供用プールのある裏庭に集合、小林多喜二と志賀直哉の関係について、お話を聞いた。

多喜二は「小説の神様」とも言われた志賀直哉の作品で文学を学び、直哉に

「自分の作品に対する忌憚ない意見を聞かせて欲しい」と手紙を添えて、代表作『蟹工船』を送ったそうだ。直哉は「プロレタリア運動の意識が作品として不純になる」と返信し、それを受け取った多喜二は、特高の眼をくぐり、5 か月後に志賀邸を訪問したという。志賀の印象は、「多喜二は自分の思想を押し付けることもなくおとなしい様子であった…」と記し、翌日、直哉と、直哉の息子・直吉の三人で、あやめ池遊園地に遊びに行っている。この時、特高に付け狙われていた多喜二は、大阪へ行く事は志賀に迷惑をかけるという理由で辞去し、目立たないあやめ池に行ったのだという。多喜二が敬愛する志賀直哉と、文学の才能を認めた多喜二と志賀の関係が見えてきた。



志賀直哉旧邸 裏庭

<報告／岩井よお子>

志賀直哉旧邸 HP : <http://www.naragakuen.jp/sgnoy/index.html>